

全国の小学校が国民学校と云われていた頃、ほとんどの学校に新束を背負った少年が、読書しながら歩く姿の立像があった。いわゆる二宮金次郎（尊徳の幼名^{たかのり}）の像である。しかし、その像は戦後、申し合わせたように一斉に姿を消してしまった。

敗戦という言葉が私に残したのは、校門入り口に楠木正成の騎乗像と共にあった二宮金次郎の像がなくなったということであった。

それまで、学校でも家でもこの二つの像は、忠節、勤勉を代表するものとして、象徴的教えられてきたからである。その尊徳像が姿を消した理由は、尊徳を利用し、その一部にだけ光を当て「忠孝」として利用され、誤解されてきたためであった。

後日、私は尊徳の実像を伝記によって知った。それは尊徳という人がけっして「忠君愛国」の士などに留まらず、実は、もっとスケールの大きい人であったということであった。江戸時代という封建社会の中にあっては珍しく、農民が独学によって打ち立てた「実学」の実践者だったのである。この人こそわが国の近代思想史の中でも特筆される人であり、東西に遜色のない大哲学者であったのである。生い立ちや細部については、幾つかの著書に譲るとして、尊徳の思

想は西洋の自然観とは違い文字通り「自^{おのずか}ら然^{しか}り」で「如是^{によぜ}」（あるがまま）という言葉で表現されている。この理念は「報徳金毛録^{ほうとくきんもうろく}」に詳しいのであるが、「声もなく臭^かもなく常に天地は書かざる経^{あめつち}をくり返しつつ」（経とは人間の生きる道）という尊徳自身が詠んだ道歌に恐縮されている。しかし、尊徳がこの境地に至るには、もう一つの力があつたことも忘れることは出来ない。

次々と不幸に見舞われても、人間としての真の生き方を求めて已^やまなかつたことである。尊徳は独学で神、仏、儒の真髓を希求し、「論語」「大学」「中庸」「易经」等を読破したのである。その読み方はすべて武士の子弟たちの講義を壁の外から仄^{そく}聞^{ぶん}し、暗記することであつた。ところで、尊徳は神、仏、儒を思想の基盤としたがこれのみに頼っていた訳ではない。「道は書物にあらずして、行いにあるなり」というように、書物は真理を求めるための一つの目印に過ぎないといふ切っている。

尊徳は天明七年（一七八七）小田原藩^{かやま}の栢山^{かやま}に、父利左衛門、母よしの長男として生まれた。しかし、尊徳十四歳の寛政三年（一八〇〇）関東地方を襲った大風雨で、全田畑を酒匂川に呑み込まれて失い、次いで、同年父を失った。余人ならば生きる氣力をなくすところで

あるが、尊徳はその時、世の中の出来事はすべて「天の道」とし、世の中には人為では如何ともし難いものがあり、人間はそれを受け入れるしかないと考えたのである。さらに、母を失い悲嘆の中にあっても、天も自然をも恨むことなく、人間としての生き方を求めて止まなかった。

土地のない尊徳は、菜種を川の土手や荒地に蒔きそれを増やし、持ち前の勤勉さと才覚によって二十二歳で家を再興した。このころから四書、五経を諳んずるまでに学び、自分のものにしたと言われている。學問的には一般解釈と齟齬そごするところもある二十六歳のとき、その博学が聞こえて、小田原藩の家老服部家の子どもも家庭教育師を依頼されるまでになっていた。さらに、その博識と人格に加えて、天才的数理計算能力を買われ、小田原藩管轄の宇津氏現在の群馬県館林市桜町の財政建て直しを依頼されたのである。

尊徳は七年間寢食を忘れてこれに取り組んだ。しかし、永年易きと怠惰に慣らされた農民の意識を変えることは難しかった。さらに、元の名主と小田原城から監察として派遣された役人が手を結んで尊徳の改革に悉く反対したのである。尊徳の身を削るような献身的な努力も思うように効果は挙がらなかった。しかもこともあろうか、

この二人は小田原城主の大久保氏に尊徳を讒訴さんそしたのである。尊徳の進退は窮まった。かれが生涯で味わった絶望にも近い、最も苦しい思いを味わったのはこの時期だったかも知れない。人が最も無念に感じるのは善意が歪曲されて、悪意に解釈される時だからである。尊徳はある日、誰にも言わずに行方不明になった。その後、三ヶ月間の果て辿りついたのは成田山新勝寺であった。ここで二十一日間不動尊の前で断食、座禅に入った。不動尊とは文字通り動かないことを尊しと教える仏であり、その手に持つ縄と剣は己の邪念を縛り欲望を絶つ姿として現されている。尊徳がその真意に気づいた頃、桜町の村人にも変化が起り始めていた。尊徳が村から居なくなってから百日余りで村が物心両面において荒廃していく様子に気づき始めたのである。自然発生的に尊徳に対する同情心が湧き起こり、事の真相が小田原城に伝えられて、讒言した監察人は罷免、元名主はところ払いとなった。

断食満願の日、村人たちは土浦街道筋まで出迎え、「先生」「先生」と口々に叫びながら全員がとびついたり記録にはある。尊徳の改革はこのことを機に急転回で進捗したともある。このとき尊徳は天を仰いで「天が見ていて下さった」と大声をはり上げ泣き叫んだとこ

れも記録に残っている。

尊徳の理念は要約すると、天の道や自然推移、天変地異は人間の力では変えようがない。しかし、人の道は人の叡智がつくり出したものであるから、それを保持し発展させていくには努力が必要であると結論づけた。そして、それを当時の農民にも解りやすくするために、人間として誰でも実践可能な三本の柱として、勤勉、分度、尊徳自身が創始した報徳仕法で、自己の社会的、経済的實力を知り、それに応じて生活の限度を定めること）推譲、を説いたのである。

尊徳のこの哲理を一般には「一円融合論」というが、これは当時の中心理念であった朱子学の理気二元論とも、また、一元を精神に求める観念論とも、ましてや物質に求める唯物論とも違っている。尊徳の一元論は精神でも物質でもない第三の实体、宇宙万物の生成発展の混沌とした一円だったのである。地動説さえ信じる人の少ない江戸時代にあって、宇宙生成と個としての人間存在を相對相關に観ている視点は俊才を超えて天才といわざるを得ない。

現代ほど、倫理観や畏れの宗教観が欠如している時代はないと言われている。尊徳の理念を分かり易く言い換えるならば、人間が人間としての尊嚴を認め合うためには、勤勉、誠実、質素、儉約、謙

譲、惻隱の心を取り戻すことということになろう。これこそが、我が身をも幸せにする原点だからである。因みに、二宮尊徳は安政三年（一八五六）七十歳で没した。

参考文献 日本 of 名著・ 中央公論社

幻 of 講話・ 実践人 of 家